

# ナポレオンとフランス革命前の 軍事思想家達

野村 清英

平成15年2月5日

## 概要

フランス革命の後半からナポレオンは軍人として活躍し、後に皇帝となり、全ヨーロッパを征服するに至った。ナポレオンの事業を可能にした要素としてフランス革命による国民皆兵、彼自身の才能は良く知られているが、18世紀後半に現れたフランスの軍事思想家たちと、彼らが行なった軍制改革が背景にあることはそれほど知られていない。彼らの業績について紹介する。

## 1 17-18世紀の西欧の兵器と軍隊

この時代のヨーロッパの軍隊の兵器は、歩兵用としてマスケット銃とライフル銃がある。いずれも銃口から黒色火薬と弾丸を装填する形式(前装式、立った状態で装填する)であった。ライフル銃は銃身の内側に螺旋状の溝があり、弾丸に回転が与えられるためジャイロ効果で弾道が安定し、射程距離(有効射程距離 150-300 m 程度)が高かったが、その代わり当時は装填が難しく(弾丸が螺旋状の溝にうまく食い込み発射ガスを逃がさないように、弾丸の周りに詰めものをした)発射速度が低く、また火薬の燃えカスで螺旋状の溝が詰まるため頻繁な手入れを必要としたため、主に狩猟用に使われた。マスケット銃は弾丸に回転が与えられないため有効射程距離が短かった(50-100 m 程度)が、比較的発射速度が高かった(といっても1分間に2-4発程度)。<sup>1</sup>

大砲は前装式滑腔砲のみであった。要塞砲・要塞攻略用の射程距離および威力は大きい重い大砲と、比較的軽く移動しやすい野戦砲とがあっ

<sup>1</sup>20世紀初頭のライフル銃は有効射程距離 500 m, 発射速度 10-20 発/分

た。野戦砲にはカノン砲と榴弾砲があった。カノン砲はほぼ水平弾道であるので有効射程が限られ(500-1000m)、何よりも味方部隊の頭上を越えることができないので味方部隊の前方で射撃し、本格的戦闘の始まる前の支援をした。<sup>2</sup>それよりもやや砲身の短い榴弾砲は曲射弾道で有効射程は約1000mであった。砲弾としては、鉄の実体弾(“roundshot”)と、榴弾(“shell”, 内部に火薬を詰め、着弾直前に爆発するもの、榴弾砲より発射)、散弾(“canister”, 薄い錫のケースに多数の銃弾詰めたもの、近距離での突撃に対処する)があった。大砲の運用はフランス革命に至るまで軍人ではなく、民間人技術者が行なった。

騎兵の価値は小銃、大砲の発展と共に低下してはいたが、偵察、包囲、(火力戦で弱体化した相手に対する)突撃、追撃といった用法にはまだ価値があった。

ヨーロッパの経済力の向上と共に大規模な軍隊が現れるのは、17世紀、特に30年戦争の頃からである。また国家財政・行政組織の整備にともない、常備軍が誕生した。常備軍は、16世紀末のオランダ独立戦争から始まり、スウェーデン(グスタフ・アドルフ)をへて、フランス(ルイ13-14世の時代、ル・テリエ(Le Tellier), ルーボア(Louvois)親子の指導)で大規模なものになり、各国に広まっていった。フランスの常備軍は、傭兵を基礎としたものであったが、傭兵部隊を戦争など必要に応じ雇い戦争終結とともに解雇するのではなく(この場合、傭兵部隊の指揮官は兵士の募集と部隊の指揮権を握り、国家から独立した存在になる)常備軍として国家が(士官とは別に会計担当者から)兵士に対し定期的な給料を支払い、国家が士官を任命することで人事権を握っていた。

この時代には、補給品の大部分は食糧および馬のまぐさであり、弾薬はごく一部を過ぎるに占めなかった。

## 2 30年戦争後からフランス革命までの西欧軍隊

小銃の発達と、常備軍の登場にもかかわらず、まだ軍隊の運用法にはかつての槍を中心とした白兵戦時代(例:スイス槍兵隊)の名残があった。密集隊形、兵力の分割への強い抵抗などである。分遣部隊は、主力を弱体化させるのみならず、分遣部隊自体が常に殲滅の危険に晒されていると考えられていたからである。兵力密集の習慣は使用可能な兵力増大と

---

<sup>2</sup>20世紀初頭の野戦砲は曲射弾道を描き、射程10km程で後方からの支援可能であった。

ともに、戦略的機動力の低下を招くことになった。

## 2.1 背景

この時代は全面的な宗教戦争である 30 年戦争がドイツに多大な荒廃をもたらしたことの反省からか、戦争目的が限定的、つまり一部領土、植民地をめぐる抗争、外交上の目的達成であった。

この時期の軍隊は将校は貴族、一般兵は傭兵および強制徴兵からなり、定期的な給料の支払を受ける常備軍であった（それ以前の傭兵隊は戦争時にのみ雇用されていた）。訓練はかなり行き届いていたが、人員数には制限があり、また高価でもあったので大きな損耗を伴う作戦はなかなか行なえず、その点からも限定戦争となった。

強制徴募の割合が多い軍隊（プロイセンなど）では脱走者が多く、これを警戒して散開戦術がとれず、会戦後の追撃にも支障をきたした。また、十分な補給をしていないと脱走兵の増加につながった。

## 2.2 陣形 - 縦隊と横隊

歩兵部隊はマスケット銃の火力を生かすため、3 列程度の横に広がった横隊を組み、号令によって一斉に射撃した。最前列が射撃し終ると次の列が射撃し、交替で発砲することで発射速度をあげた。前線部隊の（数百メートル）背後には予備部隊をおいていた。更に歩兵部隊の両側に騎兵を配置し、相手部隊に十分打撃を与えた後に騎兵の突撃を実行した。

しかし、移動時には横隊は不便であるので、縦隊をとった。行軍時の縦隊から戦闘時の横隊への転換には時間がかかった（数時間）し、長期に渡る訓練も必要だった。また行軍中の軍隊には戦闘能力が低く、奇襲に弱かった。

他に横隊には、戦闘時の機動（隊形変更）のためには複雑な訓練が必要、前進の際に隊形が乱れやすいこと（隊形乱れると騎兵の突撃に対し弱くなる）、また平坦な地形では有利だが、地形に起伏がある場合、村落、もしくは森林地帯では運用が困難であるといった欠点があった。

## 2.3 補給

中世以来、ながきに渡って軍隊の補給の主流は現地調達であったが、30年戦争に見られるように無秩序な現地調達は略奪となり、国土の疲弊をもたらした。また、戦闘部隊が食糧を探すと言う戦闘以外の目的で彷徨う結果、戦闘力が減少した。加えて現地調達を行なうと部隊の分散余儀なくされるデメリットもある。

これらの問題解決のため、17世紀のフランスで予め物資を予定戦場近くに蓄積する軍用倉庫 (depot) 方式が考案される。物資を運ぶ必要から輜重兵 (補給部隊) も誕生する。

当時は会戦の前に食糧を蓄積して、補給縦列で前線へと送る倉庫給養方式であったため、戦略的機動力に欠けていたといわれる。しかしこれには異論もある。結局敵地に深く侵入する場合には現地調達に頼らざるを得なかったというのである。軍用倉庫が必要とされたのは、機動戦闘より、要塞攻略のため (1箇所に大部隊が留まるので、周辺資源が枯渇する) と言うのである。

むしろ、戦略的機動力を阻害したのは大部隊での行軍のためと、脱走を恐れて部隊の散開できなかったことで現地調達に手間がかかったこと、もう一つは士官クラスへの多くの軍用行李を運ぶための馬車、重量級の大砲の輸送の問題であるともいわれている。

補給問題解決のため、しばしば河川と港湾が利用された。馬車による輸送よりも水上輸送の方がコストが安かったからである。しかしこれは使用可能なルートを制約することになった。

## 3 18世紀後半の諸改革

7年戦争でフランス軍が敗戦、とまでいかなくても十分な能力発揮できなかった苦い反省から、18世紀後半にいくつかの改革が提案され、実行されていくようになった。これには更にアメリカ独立戦争に加わったフランス軍士官の経験も加わった。

### 3.1 師団 (Division) - 分離兵団の運用

師団とは、歩兵、砲兵、騎兵 (現代では戦車部隊)、工兵などからなる独立して戦闘可能な諸兵科連合部隊である。更に戦闘行動を支えるための

後方支援(兵站)部隊をもつ。規模としては5,000-20,000人程度である。平時からの編成としては最大のものであり、これ以上の規模の部隊(軍団)は一般に複数の師団を組み合わせることで臨時に編成する。

師団(division)は元来(部隊を)分割するという意味であった。分離兵団は一見すると兵力集中の原則に反するようである。しかし、逆に兵力が多過ぎると指揮に困難をきたし、行軍でも交通渋滞を招く。戦術的にも軍の一部で敵を拘束し、一部で迂回すると言った柔軟性に欠けていた。このような問題にたいし、部隊を分割運用するアイデアが生まれた。

師団の起源は18世紀フランスに遡る。啓蒙主義時代、ギリシャ・ローマの古典が紐解かれ、こうした背景から多くの軍事思想家も輩出する。その一人にサククス(Saxe)元帥がおり、彼の考案の中に、古代ローマのレギオン(legion)にヒントを得た軍隊の編成があった。彼は機能的かつ柔軟性の高いレギオンの部隊編成に注目したのである。サククスは2個の旅団(各旅団は2個連隊からなる)と騎兵を組み合わせることで部隊を編成した。この部隊は防御目的で臨時に編成されたものであったが、師団の元祖と言えるものであった。

続いてプールセ(Bourcet)が登場する。オーストリア継承戦争でフランス・スペイン連合軍のイタリア国境地帯の作戦に参謀として従事したプールセは、山岳における部隊の分割使用にメリットがある事を見出した。横に展開する余地の少ない山道では、大軍を一箇所に集中させても混雑するばかりで、少数の敵部隊で容易に阻止される。そこで軍を分けて、複数のルートを利用して目標に進撃させることを考案した。各部隊は互いに連携して目標に向かって求心的に行動するのである。防御側は、複数のルートから敵が接近するために判断に迷うことになる。また、求心的に接近されるため、目標は包囲や後方との連絡線を遮断される脅威を受ける事になる。この結果、目標の守備隊は十分な戦闘を行う前に後退したり、あるいは後方に迂回されて破れる事になるのである。山地という制約から軍を分割せざるを得なかったことが、分進合撃を生み出した。各部隊は、進撃路の何処かで敵と遭遇しても、それぞれ独立して戦力を発揮できるように歩兵、砲兵、騎兵など異なる兵種の組み合わせられた諸兵科連合とされた。この諸兵科連合部隊は、分割を意味する division、つまり師団と呼ばれる事になる。

7年戦争では、プールセはライン戦線でブロイ(de Broglie)元帥の元で参謀として働く。この時、ブロイ元帥は1759年に限定した形ではあるが師団の運用を公式化した。これはサククスとプールセのどちらの影響か

はやや不明である。と言うのはプロイ元帥はかつてサクスの部下として働いた経験があるからである。

サクスとブールセのアイデアはギベール (Guibert) によって受け継がれる。ギベールは師団と分進合撃に注目する。彼は将来戦において勝敗を決するのは運動性にあると考え、軍の運動性を高める師団に注目した、師団は以前の一塊の軍よりも、指揮系統の簡潔さと、部隊を分ける事により個々の進撃路の交通渋滞を減らす機能を併せ持つため、運動性を高める事が出来る。こうしたメリットからギベールは、軍は常に師団を配置すべしと主張する。山岳戦の戦術であった師団と分進合撃は、より一般的な部隊運用法となったのである。

ギベールは当初 (Essai general de tactique) は戦闘が予期される場合は部隊を集中すべしと唱えていたが、後年 (Defense de Systeme du guerre moderne)、計画的な広域分散化の必要を説くようになった。これによって相手を混乱に導き、また包囲が容易となり、柔軟性が高くなるためである。防御面では (小銃及び野戦砲の) 火力増大により分散した各部隊の抵抗力が強化され、また必要に応じ相互支援することで安全性を増した。

なお、1776年の軍制改革の際に師団は完全な形で採り入れられた。

### 3.2 混合隊形 (Ordre Mixte) - 軽歩兵 (散兵) と縦隊

軽歩兵 (散兵) は横隊や縦隊のような陣形をとらずに、各個人が地形を利用して隠れ、個別に目標を定めて射撃を行なう部隊である。軽歩兵は (山岳、森林などの) 地形に邪魔されずに戦闘できる。また行軍隊形の縦隊からの展開も迅速である。このような点から、偵察、小競り合い、追撃などに活用される。ただし、主力部隊のような打撃力には欠ける。

西ヨーロッパの軽歩兵の原点は、オーストリア継承戦争でのクロアチア部隊である。彼らはゲリラ的に戦闘 (la petite guerre) を行ない、フランス軍とプロイセン軍双方に手を焼かせた。この教訓から、フリードリヒ大王は軽歩兵を採用したが、あくまで相手方の軽歩兵を制圧するためであった。

サクスはより積極的に軽歩兵 (散兵) を主力縦隊の突撃のための支援射撃に活用することを提案した。ライフルを装備した散兵で敵部隊を混乱に導き、主力部隊の突撃の瞬間にその間隙に下がるというものである。さらにアメリカ独立戦争で、散兵戦術が見直された。訓練未熟なアメリカ兵は横隊を組むことができず、やむを得ず散兵戦術でゲリラ的に

戦闘したのであるが、イギリス軍の横隊に立派に対抗し得ることが示された。

フランス革命後、フランス軍はギベールの考案した混合隊形 (ordre mixte) を採用した。この混合隊形は散兵と横隊、縦隊を組み合わせ、散兵の援護・攪乱、横隊の火力、縦隊の衝撃力を併せ持ち、さらにそれに歩兵砲を組み合わせた非常に強力かつ柔軟な隊形で、柔軟性に欠ける密集隊形を採用している他のヨーロッパ諸国軍と比較して圧倒的に有利だった。もう一つ、散兵射撃と縦隊の突撃の組み合わせは、複雑な訓練を必要とせず、戦意旺盛だが訓練未熟なフランス革命軍に適していたことがあげられる。ベテラン部隊が散兵と横隊を受け持って射撃支援を行ない敵部隊を混乱させ、その後新兵からなる縦隊が突撃を行なう形である。

軽歩兵部隊は精密射撃、ランニングなど一般部隊より高度の訓練を受けたものであった。しかし、フランス革命軍ではしばしば一般部隊も縦隊から散開して散兵の役割を果たした。

### 3.3 機動性の向上

ギベールは戦争における機動力を重視した。この影響により行軍速度が従来の1分あたり70歩から120歩への向上がなされた。

さらに部隊規模を師団単位に分割することにより、交通渋滞が減少し、戦略的機動性が向上した。機動性の向上により、分離した師団同士の相互支援が容易になった。

また、物資を現地調達することとしていたため、動きの遅い輜重車を抱える補給部隊に合わせる必要がなく、作戦行動に際して、敵軍の側面や背後への急速な展開が可能だった。

### 3.4 砲兵の機動性向上と標準化

シュバリエ・デュ・テイユ (Chevalier du Teil) は砲兵の機動性向上を提唱した (“De L’usage de l’artillerie nouvelle dans la guerre de campagne”)。戦術的には軽量化した野戦砲を運用し、その砲火を戦場で機動的に集中して敵の部隊の隊列に裂け目を作り、歩兵、騎兵の突撃支援に当たらせる。また戦略的には師団の機動性向上に寄与した。

グリボーバル (Gribeauval) は1776年、Premiere inspecteur de l’artillerie となり、効率の良い砲兵科の創設と大砲の標準化 (4,8,12 ポンドカノン砲

と 6 インチ榴弾砲に整理) および軽量化 (およそ半減) を行なった。

### 3.5 追撃

会戦直後は普通勝者と敗者の側で大きな損害の差があるわけではない。しかし退却する敗者を、軽歩兵・軽騎兵で追撃することで決定的打撃を与え、戦果の拡張ができる。ナポレオンは追撃を活用したが、追撃の重要性を指摘したのは、サックスである。彼は例として Ramillies の戦闘をあげている。

### 3.6 補給体制 (logistique)

ギベールは戦略的機動性向上のため、倉庫給養方式から現地調達に復帰することを提案した。現地調達を行なうと部隊の分散を余儀なくされるが、そのデメリットは師団編成をとったことで軽減された。かつてのように会戦前に部隊を集結させる必要がなく、分散したままでも有効に戦闘可能だからである。また、市民軍となれば脱走の恐れが減少するので部隊分散がそれほど問題とならなかった。

### 3.7 参謀システム (staff)

複数の師団の運用のためには、相互の連絡・各師団への的確な命令伝達が必要であった。他には行軍のための詳細な地図作成、各師団の行軍路の交通整理や補給の状態などの事務作業があった。これらを引き受けたのが参謀システムである。

フランス革命後であるが、カルノー (Carnot) は参謀本部として機能する陸地測量部 “Bureau Topographique” を 1792 年に創設した。

### 3.8 代案のある柔軟な作戦計画

ブールセは作戦計画立案に当たり、さまざまな偶発的事態が起こることを想定し、作戦計画には複数の代案を用意しておくことを提唱した。当初の計画がうまくいかない時には迅速に第 2、第 3 の代案を実行するよう努めるのである。



### 3.9 市民軍

ギベールは市民軍を提唱した。市民軍の高い士気と安いコストで戦争の形態が大きく変わることを予言した。しかしそのためには軍事的には訓練の簡素化、昇進システムを能力中心にすること（これは従来の上官層を占めていた貴族から強い反対を受けた）、政治的には市民社会の成立、つまり革命を前提とした。

## 4 ナポレオンへの影響

### 4.1 革命前の軍制改革を通して

1775年、サン・ジェルマン (Saint-Germain) が陸軍大臣 (Ministre de la Guerre) として任命された際、彼はギベール、グリボーバルと協力して軍制改革に着手した。しかし保守派の抵抗に会い、1777年に辞職せざるを得なくなる。改革の動きは10年後に復活し、1787年に陸軍評議会が創設され、ギベールはその幹事に任命された。

### 4.2 革命後の軍制改革を通して

カルノー (Carnot) は革命後のフランス軍の混乱と危機を收拾して、革命軍の組織を築いた。というのは、多くの軍人が国外に亡命したことで軍隊の組織に大きな混乱が生じたからである。また国外からの侵略の危機に対応して義勇軍が招集されたが、それに必要な装備、小銃、大砲、火薬の大量生産のみならず、促成訓練も必要だった。また訓練未熟な部隊に対応する簡素な戦術ドクトリンも必要であった。

多くのものは、革命以前のギベール、グリボーバルの改革と思想を受け継いだものであった。

ナポレオンとの関連ではカルノーは参謀本部として機能する陸地測量部 “Bureau Topographique” を1792年に創設した。ここで若き日のナポレオンが1795年イタリア方面担当として働いており、作戦計画をパリから送っていた（が実施は中途半端だった）。

### 4.3 ナポレオン個人への影響

ナポレオン (Napoleon) は 1785 年から La Fere の砲兵連隊の将校として勤務を始めるが、この連隊は 1788-89 年に Auxonne の砲兵学校に移動した。この学校では当時デュ・テイユ (Du Teil) 男爵 (Chevalier du Teil の兄弟) が校長をしていた。ナポレオンはすぐに校長に気に入られ、さまざまな経験を積むことができた。この時期にブールセ、ギベール、シュバリエ・デュ・テイユの書籍も含め、多くの軍事関係の書籍を読んだ。また、理論のみならず、デュ・テイユ男爵は野外で学生どうしに実際的な演習をさせ、経験を積ませた。

ナポレオンは 1794 年にイタリア方面軍の砲兵司令官として働くが、この時実質的に参謀役として作戦計画を立て、また部隊の一部も率いてリビエラ海岸沿い (“Barricades”) の征服に貢献した。この時、ギベールの軍事理論からインスピレーションを受け、また半世紀前のブールセの計画を大いに参考にしたと言われる。

ナポレオンが 1796 年のイタリア方面軍の司令官に内定した時、マイユボア (Maillebois) の会戦史 (これにもブールセが参謀として作戦計画を立案していた) のコピーをパリから取り寄せた。意図的な兵力の分散と再集中、内線作戦、後方連絡線の変換など、ブールセから学んだことは大きい。

## 5 人物

1. Comte de Saxe, Hermann-Maurice (1696-1750)

スペイン継承戦争、オーストリア継承戦争に参加。

“Reveries ou memoire sur l’art de la guerre ” (1757)

2. Bourcet, Pierre Joseph (1700-1780)

オーストリア継承戦争、7年戦争に参加。1742-1747年、フランス・スペイン連合軍のイタリア国境地帯の作戦に参謀として従事した。1756-61年には Soubise 公、Broglie 元帥の元で砲・工兵部隊の指揮を委ねられ、作戦計画を立てた。

戦後、Grenoble の参謀学校の校長となる。

“Principes de la guerre de montagnes” (1775)

(この時点では手書きのテキストであり、出版は 1888 年)。

“Memoires historiques sur la guerre 1757-1762” (1792)

3. Guibert, Jacques Antoine Hippolyte de (1743-1790)

プロイ元帥の参謀長をしていた父に従い、7年戦争に参加。1767年  
コルシカ遠征に従った後、コルシカ軍の編成と訓練に従事、その功  
績により数年後大佐に昇進。

彼の軍事思想に関する著作で当時の社交界で有名になった。

“Essai general de tactique” (1772)

ヨーロッパ各国語にだけでなく、ペルシア語にまで翻訳された。フ  
リードリッヒ大王、ワシントン、ナポレオンから高く評価された。

“Defense du Systeme du guerre moderne” (1779)

4. Broglie, Victor-Francis de, (1718-1804)

オーストリア継承戦争、7年戦争に参加。

5. Du Teil, Chevalier Jean (1733-1820)

“De L’usage de l’artillerie nouvelle dans la guerre de campagne”  
(1778)

6. Du Teil, Baron Jean-Pierre (1723-1794)

7. Gribeauval, Jean-Baptiste Vaquette de (1715-1789)

8. Saint-Germain, Claude Louis (1707-1778)

9. Carnot, Lazare Nicolas Margurite (1753-1823)

10. Napoleon (1769-1721)

## 6 年表

30年戦争 1618-48

フロンドの乱 1648-1653

ネーデルラント戦争 1667-1668

オランダ戦争 1672-1678

プファルツ戦争 1688-1697  
北方戦争 1700-1712  
スペイン継承戦争 1701-1714  
ポーランド継承戦争 1733-1735  
オーストリア継承戦争 1740-1748  
7年戦争 1756-1763  
コルシカ遠征 1767  
アメリカ独立戦争 1775-1783  
フランス革命 1789  
第1次対佛同盟戦争 1792-1797  
第2次対佛同盟戦争 1799-1802  
第3次対佛同盟戦争 1805  
第4次対佛同盟戦争 1806-1807  
第5次対佛同盟戦争 1809  
モスクワ遠征 1812  
第6次対佛同盟戦争 1813-1814  
第7次対佛同盟戦争 1815

## 参考文献

- [1] "The Ghost of Napoleon" Basil Henry, Sir, Liddell Hart
- [2] "Supplying War: Logistics from Wallenstein to Patton" Martin L. Van Creveld
- [3] "The Campaigns of Napoleon" David Chandler